

167-1

# 淡江大學 96 學年度碩士班招生考試試題

系別：日本語文學系

科目：日 文(閱讀、作文)

准帶項目請打「V」
簡單型計算機

本試題共 4 頁

注意：すべて日本語で解答してください。

問題 I 次の文章を読んで下の問いに答えてください。<26 点>

一二・一三世紀以降、ヨーロッパで大学が成立した際の社会との関係は、基本的には教会の一部と位置づけられていたと見て差し支えないと私は考えています。もちろん個々の事例には、そうでない要素や萌芽がたくさんあります。ただし、そういう細かいことを捨象して言いますと、司教座聖堂(カテドラル)を持つ教会が聖職者育成のために建てた学校に、学生たちが藁束を持って集まり、その回廊のあたりに腰を下ろして教師の話聞いたところから大学が始まったと見てよいと思います。図書館も教室も事務局もなく、学生と教師がいればそれが大学でした。

最初に建てられた建物は、金持の寄付による寄宿舎で、キャンパスがつくれるのは近代以降です。中世の大学では全てラテン語で授業をしましたからインターナショナルな性格を持っていて、ヨーロッパ中から学生が集まってきました。ですから、現在EU(ヨーロッパ連合)が加盟国の大学に入ればEU内のどの大学でも行けるようになるという事業を展開しようとしています。そういうことは状況は違いますがすでに中世でおこなわれていました。

大学は、学生集団あるいは教師の集団として手工業組合と同じかたちで生まれたのでユニベルシタスといいます。直訳すれば「組合」ですが、事実、パン屋、靴屋、肉屋等々の組合とほとんど同じ組織形態でした。教授、助教授、講師、助手は親方、職人、徒弟に対応していて、その関係もたいへんよく似ていました。例えば、大学ではオルディナリウスと呼ばれる正教授だけが教授会への参加権やさまざまな決定権を持っていたのですが、これは職人組合で親方が全ての権利を持っていて、職人・徒弟は市民権すらなかったのと同じことでした。共通だったのは組織だけではありません。パン屋や靴屋といった職人の組合が、年に一度、設立の早い順番にそれぞれの衣装を着て町中を練り歩く祭りには、大学の教授たちもガウンを着てその列に加わりました。ですから、名実ともにユニベルシタスだったわけです。

しかし学生集団は、町の職人組合としばしば争いを起こしました。これがタウンとガウンの対立です。職人組合の方はたいていその町の周辺の人々の子弟によって構成されていますが、学生の出身はさまざまです。その学生たちは聖職者の卵ですから、市民は彼らの門付け(\*)に応じなければいけません。しかし、学生は門付けだけでは生活できないので詐欺や泥棒などをして、町の風紀を乱すことがあったからです。それにもかかわらず、学生と教師が退去すると途端に大学が消滅してしまいますので、都市は大学を引き留めるためにいろいろと苦勞をしました。

[阿部謹也『大学論』]

(\*)門付け・・・金銭の施し、寄付

本試題雙面印製

系別：日本語文學系

科目：日 文(閱讀、作文)

准帶項目請打「V」

簡單型計算機

本試題共 4 頁

問題1 成立したばかりのヨーロッパの大学はどのような形態をとっていましたか。〈6点〉

問題2 下線部「名実ともにユニベルシタスだったわけです」は具体的にどういう状況を指していますか。説明してください。〈10点〉

問題3 都市と大学の学生のあいだの関係はどのようなものでしたか。説明してください。〈10点〉

問題II 前後の文脈を考えながら、A、B、Cにそれぞれ適切な文を入れて文章を完成させてください。なお、この文章の出典は、日本の元首相田中角栄が就任直前の1972年6月に発表した著書です。〈18点〉

明治百年の日本を築いた私たちのエネルギーは、地方に生まれ、都市に生まれた違いはあったにせよ、ともに愛すべき、誇るべき郷里のなかに不滅の源泉があったと思う。

私が日本列島改造に取組み、実現しようとして願っているのは、(

A )。

人口と産業の大都市集中は、繁栄する今日の日本をつくりあげる原動力であった。しかし、( B )。このような社会から民族の百年を切りひらくエネルギーは生まれない。

かくて私は、工業再配置と交通・情報通信の全国的ネットワークの形成をテコにして、人とカネともの流れを巨大都市から地方に逆流させる“地方分散”を推進することにした。

この「日本列島改造論」は、( C

)ものであり、その処方箋を実行に移すための行動計画である。

[田中角栄『日本列島改造論』]

問題III 「集団への同調」に注意しながら、次の文章を200字前後で要約してください。〈28点〉

現代の西洋社会でも、孤立感を克服するもっとも一般的な方法は、集団に同調することである。集団に同調することによって、個人の自我はほとんど消え、集団の一員になりきることが目的となる。もし私がみんなと同じになり、ほかの人とちがった思想や感情をもたず、習慣においても服装においても思想においても集団全体に同調すれば、私は救われる。孤独という恐ろしい経験から救われる、というわけだ。

独裁体制は人々を集団に同調させるために威嚇と脅迫を用い、民主的な国家

167-4

# 淡江大學 96 學年度碩士班招生考試試題

系別：日本語文學系

科目：日 文(閱讀、作文)

准帶項目請打「V」
簡單型計算機

本試題共 4 頁

本試題雙面印製

は暗示と宣伝を用いる。たしかにこの二つのシステムのあいだには一つの大きなちがいがあある。民主主義においては、集団に同調しないことも可能であり、実際、同調しない人がまったくいないわけではない。いっぽう全体主義体制にあつては、服従を拒むのはごく少数の特別な英雄とか殉教者だけだろう。しかし、こうしたちがいがいにもかかわらず、民主主義社会においても、ほとんどすべての人が集団に同調している。

なぜかという、いかにして合一感を得るかという問いには、どうしてもなんらかの答えが必要なものであり、ほかに良い方法がないとなると、集団への同調による合一がいちばん良いということになるのだ。孤立したくないという欲求がいかに強いかが理解できれば、ほかの人と異なることの恐怖、群れからほんのわずかでも離れる恐怖の大きさが理解できるだろう、しばしば、「集団に同調しないことの恐怖は、同調しないと実際に危ない目に遭うかもしれないという恐怖なのだ」ともっともらしく説明される。だが実際には、すくなくとも西洋の民主主義社会では、人びとは強制されて同調しているのではなく、みずから欲して同調しているのである。

[エーリッヒ・フロム(鈴木晶訳)『愛するということ』]

問題IV 次の文章で引用されている浅田彰の論は、「俵万智現象」をどのような現象としてとらえていると思いますか。紹介されている『サラダ記念日』の内容と関連させながら具体的に述べてください。<28点>

一九八七年夏、字余り、口語体を戦略的に多用した俵万智の歌集『サラダ記念日』がベストセラーとなる。DCブランドとは縁遠そうな公立高校の国語科教諭が綴った歌を収めたこの本は、たちまちミリオン・セラーとなり、「万智ちゃん」ブームを引き起こした。『この味がいいね』と君が言ったから七月六日はサラダ記念日』『嫁さんになれよ』だなんてカンチューハイ二本で言ってしまうといいの——「一応は自立しているように見えて、そのくせ料理だけが取柄の、つまらない女」の日常にメロドラマ風の情感をまぶして綴られたこれらの歌は、老若男女様々な層に好意的に受け止められ、俵万智は「国民歌人」となっていく。

その「万智ちゃん」旋風のさなか、浅田彰は、俵万智現象に皮肉なコメントを寄せている。

・・・俵万智現象は、<ナウ>な(\*)言葉遊びの世界の地平を広げるものというよりも、それに終止符を打つものと言ったほうがよい。あるいはまた、それによって言葉遊びの世界が徹底的に大衆化した結果、言葉と日常生活との落差がほとんど消滅してしまったとも言えるだろう。もちろん、これは突発的な現象というわけではなく、パロディ文化が差異の

167-4

# 淡江大學 96 學年度碩士班招生考試試題

系別：日本語文學系

科目：日 文(閱讀、作文)

准帶項目請打「V」
簡單型計算機

本試題共 4 頁

ポテンシャルをすり減らして力を失いつつあった傾向を、最終的に加速するものにすぎない。

ここでいわれていることは、かつての彼の用語系でいえば、ユーモアからイロニーへの転化である。「言葉遊びの世界が徹底的に大衆化」した結果、言葉遊び=パロディは日常世界を異化するという固有の機能を失い、日常生活を生きるためのたんなる要件となってしまった。日常をやりすごす方法論としてフォーマット化された「言葉遊び」は、——形式的に標準化されている以上、内部に何を代入してもいいわけだから——どれほど臆面のないロマンス(ベタ)であったとしても、素材としてとりあげることにはためらいを覚えることはない。言葉遊びというアイロニー(浅田的にいえばユーモア)の方法論が、マスレベルで標準化されることによって、ベタにみえる対象と限りなく近接していくこと。『サラダ記念日』は、ポストモダンの作法がモダンへと回帰していくことの、いわば徴候なのだ。

[北田暁大『嗤う日本の「ナショナリズム」』]

(\*)ナウな・・・英語の now から来ていることばで、「今風、現代的」を意味する。当時広く使われていた流行語。